

大阪消防 1

表紙：消防出初式会場に昇る朝日

CONTENTS

- 01：年頭にあたって
- 02：新年特集「これが私たちのSDGs2025」
大阪市消防局各課所
- 03：大阪市内25消防署
- 07：大阪府内各消防(局)本部
- 10：コンテンツ／災害概況
- 11：災害活動支援隊長あいさつ
- 12：特集 阪神・淡路大震災から30年
- 14：地域防災の輪、ひろがっています
- 15：2025年大阪・関西万博
- 16：ケイボウタイムズ
- 18：コマンドアイ
- 20：救急いろは
- 22：派遣者に聞きました !!
- 24：実録!!調査鑑識
- 26：We are Rookies !
- 28：大阪の消防NEWS
- 30：Just Do It !
- 32：落語DE火の用心
- 33：自衛消防隊紹介／女性防火クラブだより
- 34：現場に活かす！救急救命士国家試験問題
- 35：消防漢字ガール
- 36：【職務】特定小規模施設用自動火災報知設備の設置
及び維持に関する技術上の基準の改正について
- 38：救急安心センターおおさかだより／
今月の推しの一枚
- 39：健康ダイアリー
- 40：アニマル環状線／編集後記

大阪市の災害概況

◎火災概況

	建物火災				小計	車両	船舶	爆発	その他	合計
	全焼	半焼	部分焼	ぼや						
11月中件数	1	2	14	25	42	4	0	0	12	58
令和6年 11月末累計	12	18	155	339	524	40	1	2	84	651
令和5年 11月末累計	17	17	127	343	504	40	1	3	101	649
累計比較	▲5	1	28	▲4	20	0	0	▲1	▲17	2

◎救急概況

	救急出場
11月中件数 (概数)	20,166
令和6年 11月末累計	242,090
令和5年 11月末累計	239,047
累計比較	3,043

◎火災・救急以外の消防活動概況

	救助活動	危害排除	水防活動	その他の 消防活動
令和6年 11月末累計	4,212	1,209	3	1,070
令和5年 11月末累計	4,011	1,375	10	1,136
累計比較	201	▲166	▲7	▲66

新年のあいさつ

大阪市消防局災害活動支援隊長



鈴木 三千紀

新年明けましておめでとうございます。
令和7年の輝かしい新春を迎え、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

平素は災害活動支援隊の運営や活動にご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

機能別消防団として位置づけられている「大阪市消防局災害活動支援隊」は、現在671名の大阪市消防局OB職員が登録されており、大阪府内有数の規模を持つ消防団組織として大規模災害発生時に大阪市消防局と協働して災害活動を実

施することとしています。

昨年を振り返ってみますと、1月1日に「令和6年能登半島地震」、9月には「令和6年奥能登豪雨」が発生し北陸地方に甚大な被害をもたらし、改めて災害の脅威を認識するものとなりました。

能登半島地震では、地元消防団は発災直後から住民への避難の呼びかけ、消防隊と連携した消火活動、倒壊家屋からの救助活動や傷病者搬送のほか、避難所の運営支援、夜間の見回り活動など、自らも被災しながら地域住民の命と安全を守るべく活動を展開されており、その懸命かつ献身的な活動にあらためて敬意を表する次第です。

道路が寸断され関係機関による支援が困難を極める中、地域に密着した消防団が地域防災力の中核として非常に大きな役割を果たしており、その活動は全国か

ら高い評価を受け、消防団の活動の重要性が再認識されているところです。

大阪市消防局災害活動支援隊としても、活動能力の向上に向けた取組をより一層推進し、大規模災害発生時に迅速かつ的確な活動が行えるよう万全の体制づくりを努めてまいりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、本年4月13日からは此花区の夢洲において「大阪・関西万博」が開催されます。開催期間には約2,820万人の来場者が想定されており、大阪市を訪れる国内外の方が、安心して過ごせるための「災害に強いまち・安全な都市」づくりに、災害活動支援隊は大阪市消防局と一体となつて取り組んでまいります。

結びに、新しい年が皆様にとりまして明るく実り多いものでありますよう心から祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

阪神・淡路大震災から30年



平成7年1月17日に兵庫県南部を襲った阪神・淡路大震災は、日本の近代都市がそれまでに経験したことのない甚大な災害となりました。災害対策を見直す契機となったともいえる阪神・淡路大震災。未曾有の災害は、私たちに多くの教訓を残しました。

年月の経過とともに、うつりゆく記憶。30年の時を経て、被災した街の復興は着実に進んでいますが、災害の記憶を風化させてはなりません。

大阪市消防局からは、平成7年1月17日から3月31日までの間、延べ4,233人の職員を被災地である神戸市、西宮市、芦屋市に派遣し、消火・救助・救急等の活動を実施しました。

当時、被災地へ派遣され、その惨状を目の当たりにした職員の声が残されています。

「倒壊した木造家屋。途中階が押しつぶされたビル。道路には亀裂と陥没、そして瓦礫。倒れた阪神高速道路。今まで見たこともない光景。その中、何度も町の人々に救助を要請されながらも、救助隊を待つよう伝えることしかできず、救援活動のため神戸へ向かった。」
 「火災が拡大した長田は、黒煙で昼間でも薄暗かった。」
 「水が出ない。消火栓が使えない。川を土嚢でせき止め、ホースを1.2km延長、港からもホースを1.4km延長し、一昼夜にわたり炎と戦った。」
 「余震の恐怖と緊張の中の救助活動だったが、もっと多くの人を助けたかった。」

(「阪神・淡路大震災 大阪市消防局活動記録」より抜粋)

今月の特集では、震災から30年を迎えるにあたり、発災当時、大阪市内で災害対応にあたった3名の職員にインタビューを行いました。あの時、大阪市内の状況はどのようなものであったのか。当時の記憶を改めて振り返っていただきました。

地震の概要

平成7年1月17日(火) 午前5時46分52秒 兵庫県淡路島北部を震源とするマグニチュード7.3、最大震度7の地震が阪神・淡路地区を直撃した。神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、淡路島北部などで甚大な被害があり、この震災での死者・行方不明者は6,434名、負傷者は4万3,792名であった。(消防庁調べ。平成17年12月22日現在)

◆あの日の記憶 震災当日を振り返って



西消防署 副署長 後藤 俊明

〈震災当時の所属〉
警防部司令課

震災発生時は、市外の自宅で就寝中でした。体感よりも震度が小さく発表されて驚きました。地震の影響で交通機関が乱れ、約一時間遅れて消防局へ出勤してきました。指令室に入ると、119番通報の着信音がずつと鳴り響いていました。また、119番通報の着信表示板が、渦を巻くように点滅していました。指揮命令などのやり取りも、殺到する119番通報の着信音でかき消され、みんなが大声で叫んでいて、指令室内は戦場さながらの様相を呈していました。

初めての状況に戸惑いつつ、ひたすら電話を取りました。通報内容は、ガス漏れが多く、やがて全ての消防車が出払い、通報があっても現場に向かえない状況となりました。その後は、火気の取り扱いについて注意するよう、繰り返し伝えるしかありませんでした。

発災から3日後に神戸の応援に行き、がれきの山で捜索活動を行いました。日没後、消防艇で天保山にある水上消防署まで帰る途中、海上から陸の方を見ると、当時から100万ドルの夜景と言われていた神戸の街は、真っ暗でした。その異様な光景が、すごく印象に残っています。



企画部 高度専門教育訓練センター人材育成担当副所長 芦田 直浩

〈震災当時の所属〉
西淀川消防署

震災発生時は、市内の自宅で就寝中でした。今まで経験したことのないとても長く大きい地震だと思いました。

ニュースを見てただ事ではないうちの早急な対応が必要だと思いついた。早く何かしなければならなかった。その時、街中が妙に静かだったことを覚えています。

出勤後は、西淀川区でひっきりなしに活動を行っていました。ガスの漏れ、火の通報が多くなり、2時間ほどは火災の通報がなかった。木造の2階建てのアパートが炎上しており、周辺の住民によると、火災のあった部屋の住民が見当たらず、まだ部屋の中に残り残さず、行けるかもしれないとのことでした。行けるところまで行って確認をしたのですが、発見できず、鎮火したときには屋根と2階が焼け落ちた状態でした。その後、住民の方はすでに避難して無事だったことが分かり、ホッとしました。

兵庫県西宮市に応援業務で隊員を派遣するといった話も聞きました。西淀川区でも災害が多くなり、西淀川区での対応を続けました。

関西は地震が少ないイメージでしたが、震災後は意識が変わり、大地震に対する普段からの備えが重要であることを再認識しました。



警防部 司令課 指令管制担当係長 辻 清英

〈震災当時の所属〉
西消防署

震災発生時は、出勤して眠中でした。突然今までに経験したことのない揺れを感じて、今にも天井が落ちてくるのではないかと感じました。

神戸の状況をニュースで見ると、消防署に入りたての私もこれとんでもない地震が起こったという現実を感じました。

その後は、普段は行くことが少ない遠方の現場へも行きました。次の災害へ対応可能となれば、すぐに指令が来るという繰り返しで、休みなく7件連続で対応しました。

ガス漏れの対応はかなり多く、エレベーターの閉じ込めや、実際に火の手が上がっている建物の消火にも行きました。高層ビルの現場へ向かう際は、道路の窓ガラスが散乱していたり、道路が少しひび割れていたりしました。消防車が通行できなかったことが、消防署にはありません。

私は現在、指令情報センターで勤務していますが、大きな地震が起きた場合は、消防車や救急車が足りなくなるとは明白です。その場合は、自助が必要になります。自分自身で守る力を防災訓練などで、少しでも身につけることが最も重要だと思っています。

◆おわりに

阪神・淡路大震災を教訓として様々な消防の体制が見直されました。国内で発生した地震等の大規模災害時における人命救助活動等をより効果的かつ迅速に実施する「緊急消防援助隊」は、この阪神・淡路大震災を契機として1995年6月に創設されたものです。その他、大阪市消防局では特別救助隊の発足や、遠距離大量送水システムの導入等も行われました。

阪神・淡路大震災で災害対応を実施した職員も近い将来退職を迎えます。災害の記憶を風化させないためには、次の世代にこの経験を伝えていかねばなりません。

そして、この貴重な経験を受け継いだ職員は、南海トラフ巨大地震など今後発生が危惧される大規模災害に備え、消防体制の更なる強化や地域防災力のより一層の向上を図るなど、それぞれのセクションにおいて、与えられた職務を全うする責務があります。

大阪市消防局は、これからも市民が安心して暮らせる「災害に強いまち・安全な都市」をめざしていきます。

3名のインタビュー記事が、大阪管区気象台のホームページ内「阪神・淡路大震災特設ページ」に掲載されています。詳しくはコチラ↓



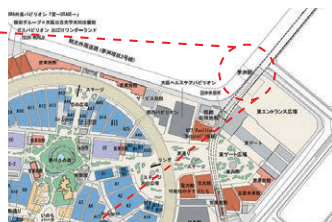
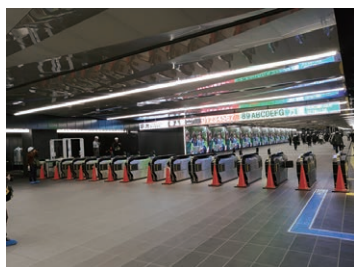
開催まであと98日です!!

※（令和7年1月5日現在）

夢洲駅外観



コンコース（改札付近）



提供：2025年日本国際博覧会協会

みなさん、新年あけましておめでとうございます！

昨年4月から毎月連載している2025年大阪・関西万博（日本国際博覧会）の記事を、今年も引き続きご覧くださりありがとうございます。
 今まで掲載してきた記事の中で、「2025」という数字を幾度となくお伝えしてきましたが、とうとう2025年が訪れ、万博の開幕がもう目の前に迫っています。
 新年初めの記事では、夢洲にある万博会場へ来場するための肝となる、大阪メトロ「夢洲駅」についてご紹介したいと思います。

「夢洲駅」について

中央線をコスモスクエア駅から北西へ3.2キロ延伸し、1月19日に開業を控えています。
 中央線延伸部（コスモスクエア駅から夢洲駅間）の開業に伴い、万博会場のある夢洲へ直接乗り入れる唯一の鉄道アクセスルートとなっております。大阪・関西万博開催期間中は多くの来場者の方々がこの駅を利用することが予想され、ゆくゆくは大阪・夢洲地区特定複合観光施設区域の整備計画「統合型リゾート（IR）」へのアクセス路線としても利用される予定です。
 また「大阪・関西万博 来場者輸送具体方針（アクションプラン）」によれば、一日に万博会場に来場する方々のうち、実に57%もの割合の方が夢洲駅を利用することが予想されており、今回の大阪・関西万博と来場者の皆さまを繋ぐ重要な役割を担っています。



大阪・関西万博公式キャラクター ミヤクミヤク ©Expo 2025

安全対策について

先に触れた輸送具体方針の中では、大勢の来場者の方が夢洲駅を利用する中で雑踏による事故等が発生しないよう、一時的な改札制限や、閉場時間に向けての会場からの早期退場の促しなど、安全対策が検討されています。
 大阪市消防局では、それらの通常時の対策に加えて、夢洲駅で万一事故等が発生した場合に博覧会協会や大阪メトロと連携し、迅速に対応できるように常に備えていますので、ご安心ください。

おわりに

万博開催まで残り98日、閉幕までも残りわずか282日です。
 皆さまどうか、万博という未来への希望を感じられる貴重な体験を逃すことなく、会場まで足を運んでいただければと思います。
 大阪市消防局は、そんな来場者の皆さまの安全を確保すべく、本年も引き続き全力を尽くしてまいります。

夢洲駅の概要	
構造	地下1階：コンコース 地下2階：ホーム
コンコースの通路幅	18メートル
改札	16基（万博開催時）
ホーム全長	160メートル
ホーム幅	10メートル

～地域防災の輪、ひろがっています～

大規模な災害が発生すると、行政機関の力だけでは災害に立ち向かうことはできません。そんな時は、地域の皆様と一緒に災害へ立ち向かうことが必要となってきます。大阪市消防局では、いざという時の地域防災力向上のために様々な取組を行っています。このコーナーでは、その取組内容を紹介いたします！



◆ 消防署開放デー「西消防署フェスティバル2024」を開催 ◆

「一日消防署長イベント」と、

地域のボランティア団体によるコンサートで盛り上がりました！

一日消防署長イベントを実施

10月19日（土）、西消防署は、消防署開放デー「西消防署フェスティバル2024」を開催しました。このイベントでは、従来の開放デーの実施項目である起震車による地震体験、バツリカーの運転コーナー、ミニ消防車と子供防火衣の記念撮影コーナー、車両展示等のほか、NHK連続テレビ小説「おむすび」にも出演された女優の東 葉凜（あずま まりん）さんを一日消防署長として迎え、オープニングイベントを実施しました。制服を身にまとった凛々しい姿を観覧に訪れた皆様に披露し、フェスティバルの開催宣言とともに、災害が発生した際の地域住民の皆様による「自助」と「共助」の重要性を呼びかけました。その後、東さんの指揮のもと出場訓練を実施し、会場は大いに盛り上がりました。その他にも、指令情報センターや、消防車両の資器材等を見学され、日ごろの防火・防災の重要性を再認識していただきました。



女優の東 葉凜さんを一日消防署長としてお招きし、フェスティバルを盛り上げていただきました



消防署の講堂でコンサートを開催

さらに当日は、西区社会福祉協議会の西区ボランティア市民活動センター登録団体であり、「生演奏の出前をいつでもボランティア」として活動されているボランティア団体「ウィークデイアンサンブル」と、大阪府内で活躍されている現代舞踊家の方をお招きし、ウィークデイアンサンブルと職員が合同で制作した、西消防署のキャラクターである「かんちくん」のテーマソングとダンスを含む、計9曲を披露しました。

テーマソングの歌詞が住宅用火災警報器の設置と維持管理を呼びかける内容となっており、まさに、「あそんで、字べる 楽曲として子どもからお年寄りまで幅広い年齢層の方々に大好評でした。」



西消防署講堂でのコンサートの様子

消防署開放デー開催の目的は、地域に開かれた消防署を実現し、幅広い年齢層に防火・防災意識を啓発する点にあります。また、消防と地域の方々が連携することで、その結びつきが強化されるだけでなく、幅広い年齢層の方々に対する啓発活動を実施することが可能となります。今後とも積極的に地域の方々と連携し、地域の結びつきと防災力の向上を目指して、取り組んでまいります。



西消防署講堂でのコンサートの様子

ケイボウタイムズ

～警防課の「いま」を伝える～

第9回 安全管理隊について

(本部特別高度救助隊・大規模災害救助隊)

災害現場での活動を支える「警防部 警防課」。
「ケイボウタイムズ」では、毎号、警防課の各担当による
「この時期だから伝えたい」旬なネタを掲載するほか、
警防課が取り組む施策や事業についてお伝えします。

安全管理隊ができた背景

災害現場における安全管理任務は、平成25年まで方面隊及び救助指揮支援隊が担っていました。その後、北管内の火災現場で崩落に巻き込まれた消防隊員が負傷したことを受け、「安全管理隊の専従化に伴う暫定運用について(通知)」(令和3年3月3日付け消警958号)により安全管理隊を指定し、暫定的に運用を図ってきましたが、より強固な体制を確立するため、令和4年1月1日から安全管理隊の運用を開始。出場隊を専従化し、より効果的

かつ効率的に安全管理体制をとることができるようになりました。
出場隊を大規模災害救助隊である北特別救助隊、中央特別救助隊、西特別救助隊、大正特別救助隊、城東特別救助隊、阿倍野特別救助隊とすることでスキルアップに必要な教養及び訓練を集中的に実施することができ、また大規模災害救助隊から所管する救助隊に迅速に周知徹底することで、安全管理対策のさらなる強化を図っています。

安全管理隊の出場基準

- 木造の炎上火災で、建物の崩落又は倒壊等のおそれがある場合
- 炎上火災現場で、消防隊が狹隘な道路等において活動する場合
- 第4類危険物事業所警防計画適用火災、船舶火災(係留船舶)及びトンネル火災において煙気がある場合
- 高所活動が長時間に及ぶ場合
- 警防活動が著しく長時間に及ぶ場合
- 通報内容、高所カメラ情報等により、消防隊の活動危険が高い災害と判断される場合
- 呼吸器を着装した隊員が、長時間呼吸管理を必要とする場所で活動する場合
- 地下鉄、地下街、建物地階等において呼吸

災害現場における安全管理

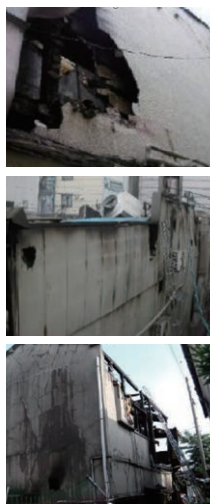
安全管理の着眼ポイント

①服装・装備

- 防火衣の着装状況の確認
- 呼吸器の各ベルトの着装状況の確認
- 安全帯の密着状況の確認
- 防護面の活用状況の確認
- 携行資器材の落下防止等の確認

②倒壊

- 被災建物の構造様式の把握(特にモルタル塗壁)
- パラペット構造の壁や看板の確認
- 亀裂、変形、歪みの有無の確認(建築年数が経過している建物は、構造上脆弱と推測)



倒壊現場

③落下物



落下物の確認

- 目線より高い箇所からの落下物の確認
- 軒先の崩落(屋根の焼け抜けで危険性大)

④踏み抜き

- 波板やスレート屋根は乗ると踏み抜く可能性があるため注意喚起
- やむを得ず乗る時は適宜、足場用意の指示

⑤転落・転倒

- 放水で濡れた階段は滑りやすいため昇降時の注意喚起
- 工場などでは、ピットや荷物用リフトの堅穴がある場合があるため、視界が悪い場合の注意喚起
- はしご登はん時の確保ロープの設定、乗り移る場合の三点支持の周知徹底
- 夜間で、通水されたホースが多数ある場合は、躓きや転倒による怪我防止の周知

⑥火傷

- 燃焼建物への進入には放水体制を確保し、進入前には装備の確認の徹底指示
- 急な吹き返しによる顔面熱傷を防止するために、防護面及び面体活用の周知徹底

安全管理標識



の表示を、ベストの裏面に「指揮」「安全管理」の表示に付け替えて、防火衣の上に着用します。

指揮ベスト安全管理標識



装着にあわせた呼吸器を着用し、呼吸器に「安全管理」の表示を巻きつけます。

呼吸器用標識着装状況

- 焼き切れて垂れ下がっている電線への注意喚起及び危害防止措置
- 放水された水を通して感電する恐れがあるため注意喚起
- 放水
- 対向放水に備えた防護面の活用と、対向放水にならないよう対面側の活動状況の把握
- 熱中症
- 活動隊員の体調及び顔色等の把握
- こまめな水分・塩分補給の指示
- 長時間の活動を要する時は早めの交代指示

⑦電気

- 送電停止の確認
- 三連はしごや警防資器材が電線に触れていないか確認

立入禁止テープの活用

各種災害現場の安全管理体制を万全にするため、立入禁止テープの活用方法を定めています。

立入禁止テープ(赤色)の活用方法



消防隊活動禁止区域

安全管理隊の配置がなく消防隊の活動や進入を禁止する区域



消防隊活動制限区域

必要に応じて安全管理隊を配置し、消防隊の活動や進入を制限する区域

安全文化を築くために

「安全文化の醸成」と「安全管理の徹底」を成し遂げるためには、組織全体の意識改革が必要不可欠です。「絶対に一人の職員も負傷させない」という強い決意のもと、全員が安全を最優先に考え、災害現場だけでなく、訓練においてもリスクを見逃さず、互いに情報を共有し合うことが求められます。そのためには、職員一人ひとりが自らの行動を見直し、改善を繰り返す必要があります。市民が安心して暮らせる「災害に強いまち・安全な都市」を目指すために、力を合わせて「安全文化」を築いていきましょう。



東方面隊

火災現場における指揮者の連携について

■はじめに

当局では、平成22年に「指揮本部要員の強化、局面指揮体制の早期確保及び安全管理体制の強化」を目的とし、「指揮班」が創設されました。今年で14年の年月が経ち、今ではこの指揮班の存在は統制の取れた部隊活動に必要不可欠ということは言うまでもありません。

今回は初夏の昼間帯に発生した、密集地域水利指定計画地域において、木造トタン葺モルタル塗一部トタン張2階建1棟1倉庫1住宅の3方向に延焼危険がある面火災において、指揮本部長と指揮班との終始適切な現場判断と安全管理の徹底により、モルタル壁の崩落等があったものの負傷者を出すことなく火災を制圧した、まさに指揮体制の早期確立と安全管理体制の強化が実を結んだと言える事案についてご紹介します。

■火災概要

覚知日時	11時57分
第一出場	11時58分
第二出場	11時59分
包囲体制完了時刻	12時23分
鎮圧時刻	13時17分
鎮火時刻	15時41分
焼損状況	
焼損棟①	木造トタン葺モルタル塗一部トタン張2階建1棟1倉庫1住宅(建116㎡延172㎡)のうち1階32㎡及び1階小屋裏28㎡焼損
焼損棟②	木造瓦葺モルタル塗2階建空家(建60㎡延120㎡)のうち、2階40㎡焼損
負傷者	なし
出場隊	消防車両33台ヘリ1機

■活動内容

「火災指令、〇〇管内地域計画Y・A水利(密集地域水利指定計画地域)適用火災、平家建倉庫出火、高所カメラ情報白煙有り、本部判断第二出場指令・・・」

大消本部からの一斉無線により出場各隊に緊張感が漂う中、先着隊の「黒煙あり、20㎡燃焼中」の無線が入った。

先着隊到着時、1棟1倉庫1住宅の倉庫から黒煙が噴出し隣接建物へ延焼拡大している状況であり、延焼危険方向は東を除く3方向の面火災であった。直近隊、中継隊は現場到着後、早期に延焼危険方向側からの筒先配備を展開し、各方面指定隊は密集地域で道路狹隘であったにも関わらず、指定消火栓へ部署完了し、事前任務どおりの筒先配備を実施した。

指揮本部長は現場到着後、延焼危険方向、火元の要救助者と行方

■安全管理

築年数が古い焼損棟は、瓦葺屋根等が焼け落ち、軒先の崩落危険等の多数の危険箇所が点在した。長時間の活動により疲労が見える中、崩落等による職員負傷が発生することも十分あり得る状況で

あったが、指揮本部長は、早期に火元建物の主要構造部を把握し、崩落等の危険性があることについて、安全管理隊、指揮班と情報共有し、連携を密にして各隊へ危険箇所や危害防止の周知を積極的に行い、天井のたわみや外壁の状況などから、進入統制を実施するな

ど二次災害防止措置を行った。また、発生時間帯が酷暑時期の昼間帯であったことから、各指揮者が活動隊員の一定時間の休憩、パネル水槽への入水やこまめな水分補給を促し、熱中症対策を講じる等、体調管理に注力し、危害防止に努め、結果的に一人も負傷者を出すことなく、鎮火に至っている。

■活動を振り返って

今回紹介した火災事案は火元周辺に3方向の延焼危険があり、密集地域で地理的条件の悪い場所ではあったが、直近隊、中継隊は延焼危険側へそれぞれ筒先配備が完了し、各方面指定隊も事前任務を忠実に遂行し適切に筒先配備ができていた。この円滑な防ぎよ活動を行えた背景には、各小隊長の判断もさることながら、指揮本部長及び各指揮班の的確な指揮があったと史料される。また主要構造部が強い焼きで、軒先の崩落等が発生したにも関わらず人的被害もなく、暑さ厳しい夏場の昼間帯の火災であり、熱中症を引き起こしてもおかしくない状況下で誰一人として体調不良を訴える隊員が発生することなく活動できたのは、各指揮者の綿密な部隊管理の賜物で

不明者の有無を確認し大消本部へ即報した。

その後、第1指揮班及び第2指揮班がほぼ同着で指揮本部へ到着し、指揮本部長は、火災現場の状況を正確に把握するため、第1指揮班長へ北側の指揮及び東側の安全管理、第2指揮班長へは西側の局面指揮を命じた。

第1、第2指揮班は受命した各方面の燃焼状況や筒先必要数の把握に努め、活動危険の予測、消火隊の筒先配備等を適切に行い、指揮本部と活動方針の共有を実施し、早期に包囲体制を完了した。



ある。

災害現場、特に火災現場は刻一刻と状況が変わり、消防隊は何を優先するかを決断を常に求められる。現場状況を適切に判断し、「燃焼状況に対して筒先数が足りているのか、延焼を食い止めるにはどうすれば良いのか、活動危険はどこなのか、火災現場での指揮班の任務はこの確認と判断の繰り返しである。今回は時期を逸することなく適切な対応が取れたことにより、被害拡大防止に繋がったのではないだろうか。

■おわりに

本事案は、指揮本部長と指揮班との連携、部隊管理により、効果的な活動が展開できていた。本事案のように災害状況に応じた現場観察、適切な判断ができるように常日頃から知識の幅を広げていく必要がある。

災害現場に同じものは2つとないが、我々プロの消防職員は、どのような状況下であっても、市民の生命・身体・財産を災害から守ることを大前提に、誰ひとり職員負傷を発生させないよう日頃から高い意識で、困難な災害にも対応できるよう備えなければならない。

防御図

